

## 道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和3年度 第3号 2022年1月24日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

### 令和3年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（3次調査）結果

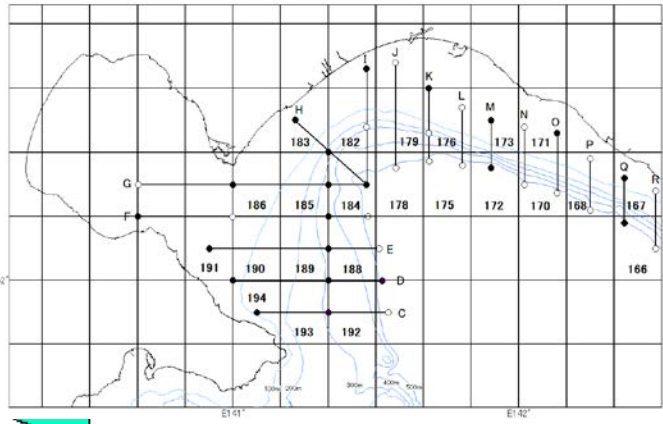
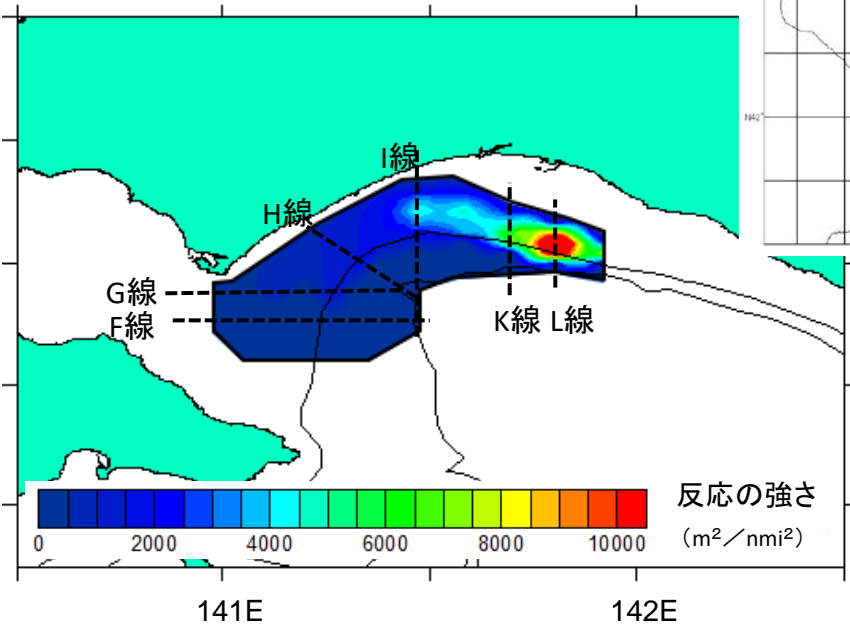
函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2022年1月15～17日（漁獲物調査2022年1月18～20日）
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深50～500mの海域（図1右上）

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を上回った。
- ・ 魚群反応の強い海域は胆振沖（苫小牧～むかわ沖）。
- ・ 反応の比較的強い水深は100m付近及び150～250mにかけて。
- ・ 沖底及び刺し網で漁獲されたスケトウダラの生物測定を行った結果、どちらの漁獲物も体長（尾叉長）40cm台前半が主体となっていた。

1. 今回の調査は、荒天により調査期間が短縮されたことから、C～D及びN～Rラインの計量魚群探知機による観測はできませんでした。このような状況下でしたが、スケトウダラとみられる魚群は、調査海域全域で分布がみられました。その中でも胆振沖の173・176漁区（苫小牧～むかわ沖）には強い反応がみられました（図1・2）。
2. 今年度は渡島沖の魚探観測が一部のライン（C～Dライン）で実施できなかったことから、そのラインを除いた平均反応量で比べると、今年度の平均反応量は前年同期を大きく上回りました。ただし、今回調査ができなかったラインは過去の調査結果から反応量の少ない海域であることから、今年度の平均反応量はやや過大になっている可能性があります。そのため、例年と同様の魚探観測を行った胆振沖（G～Lライン）の平均反応量で比べてみたところ、胆振沖だけでも前年同期をやや上回っていました（図3）。
3. 魚群反応は、水深50m以深の広い範囲で観察されました。その中でも水深100m付近及び150から250mにかけて比較的強い反応がみられました（図4）。渡島沖（F・Gライン）では水深150～250mにかけて（図2-1）、また、胆振沖ではこれに加えて100m付近にも海底に張り付いた反応がみられました。ただし、苫小牧沖（Lライン）では海底から離れた（浮いた）反応もみられました（図2-2）。
4. 今年度の調査では、トロールによる漁獲調査ができなかったため、漁獲物の組成については、金星丸による調査の後に行った沖底及び刺し網の漁獲物調査の測定結果を記載します。これによると、沖底漁獲物（栽培水産試験場実施）及び刺し網漁獲物ともに、体長（尾叉長）40cm台前半が主体となっていました（沖底ではモード41cm、刺し網ではモード43cm）（図5）。また、成熟状態（メス）を調べた結果、両漁獲物とも7割以上が完熟卵（水子）となっており、産卵が終了した個体も1割程度確認されました（図6）。

なお、今年度のスケトウダラニュースは本号で終了となります。



※今回の調査では、荒天により調査期間が短縮されたため、C-D及びN-Rラインの計量魚探観測はできませんでした。

42N

図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

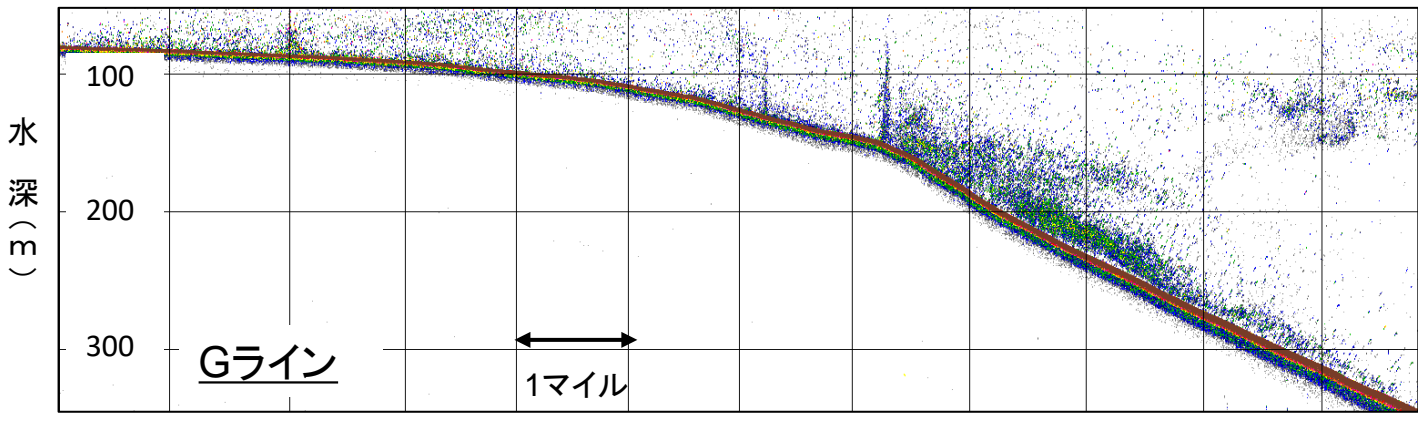
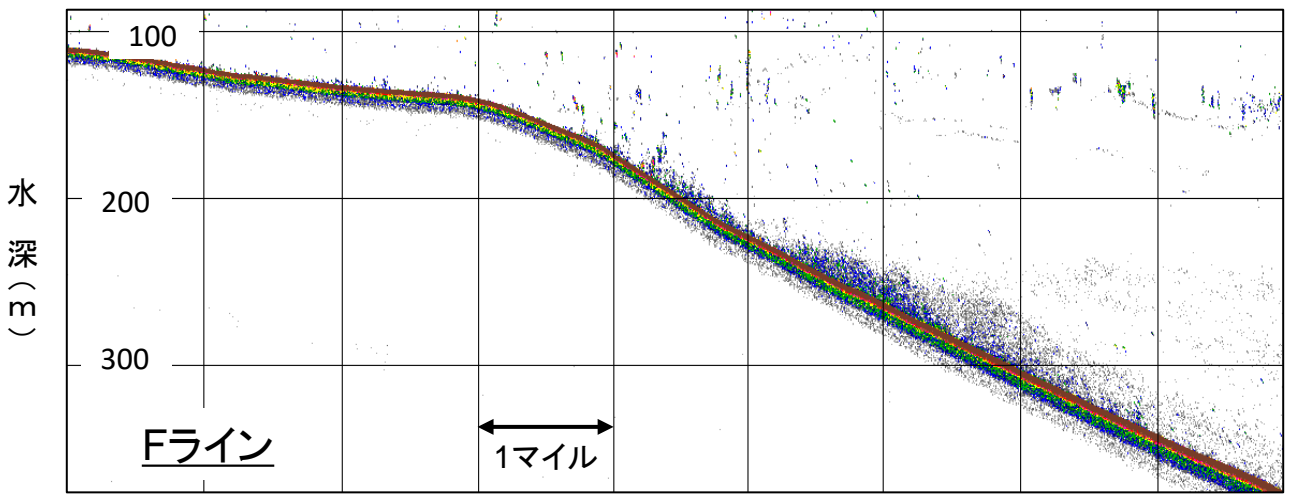


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

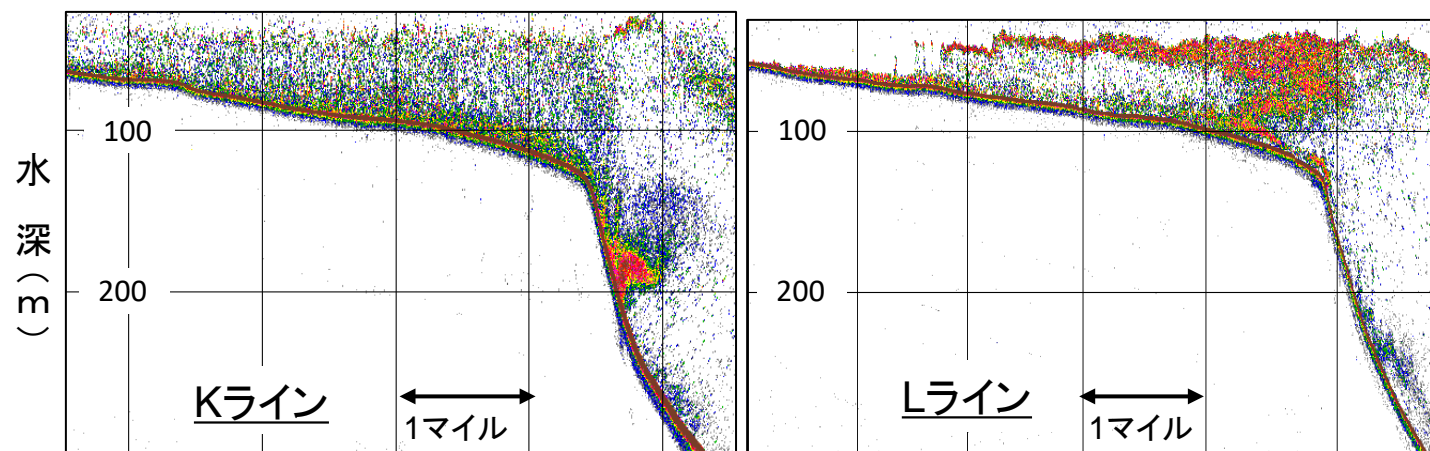
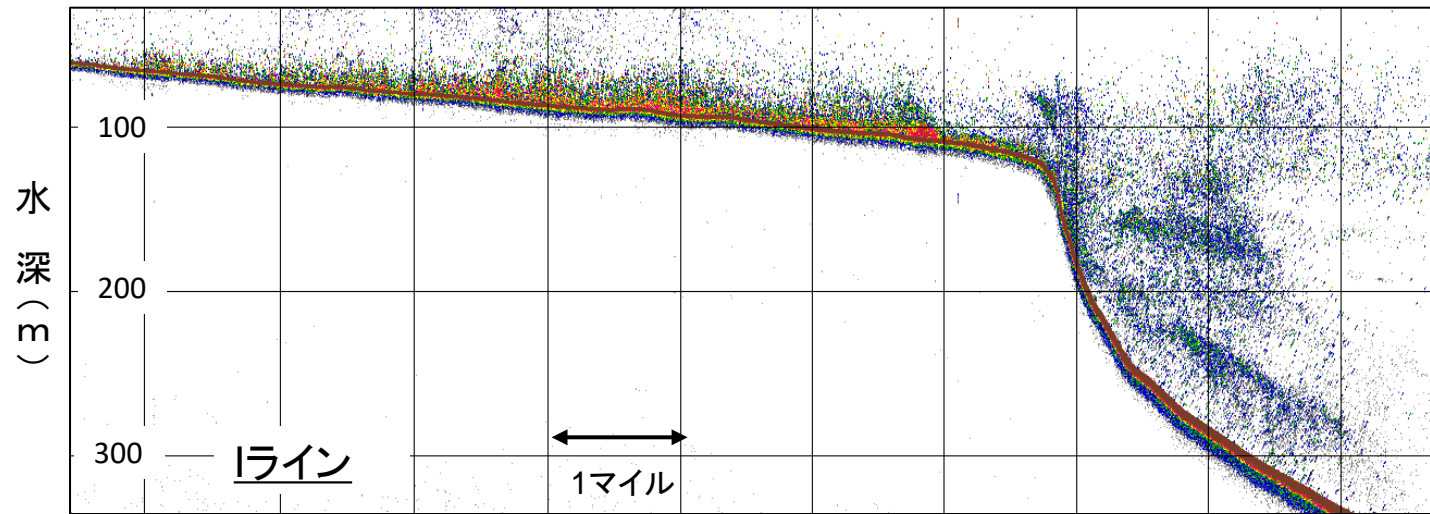
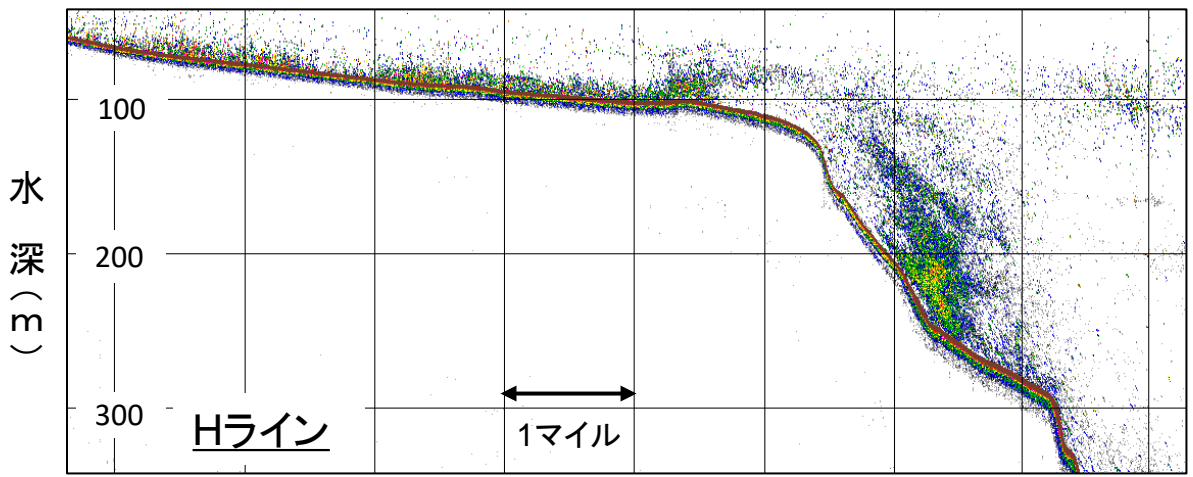


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

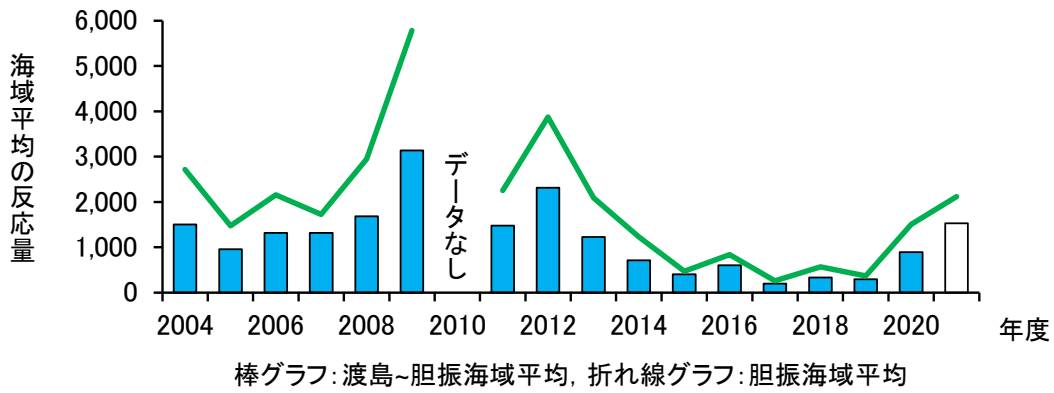


図3 調査海域における魚探反応量の推移

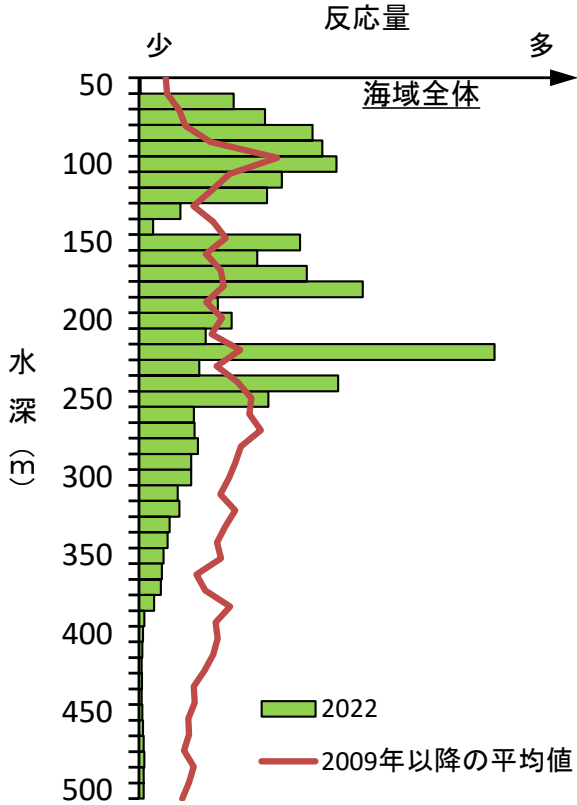


図4 水深別の魚探反応量

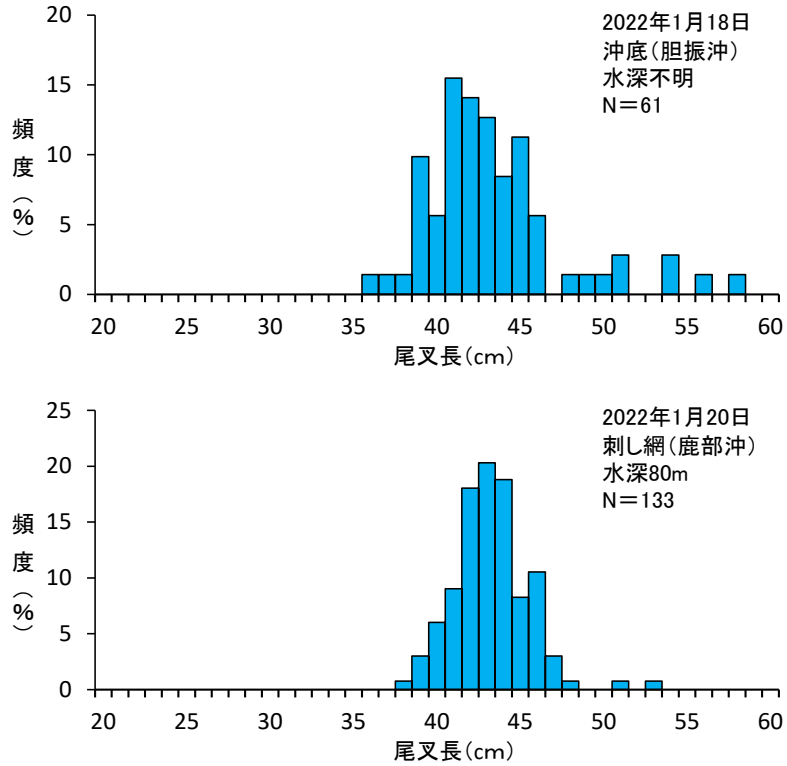


図5 スケウダラ漁獲物の体長組成  
上: 沖底漁獲物, 下: 刺し網漁獲物

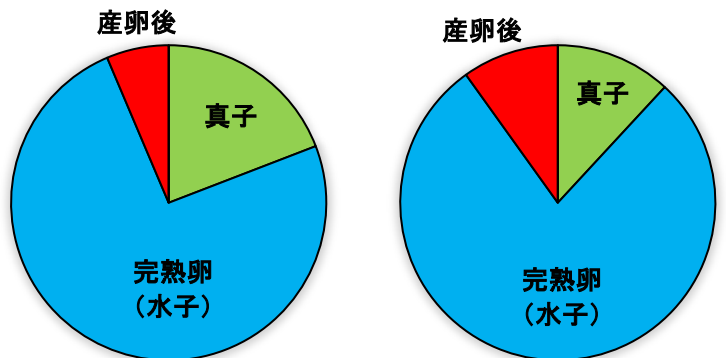


図6 漁獲物の成熟状態(メス)  
左: 沖底漁獲物, 右: 刺し網漁獲物